

平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

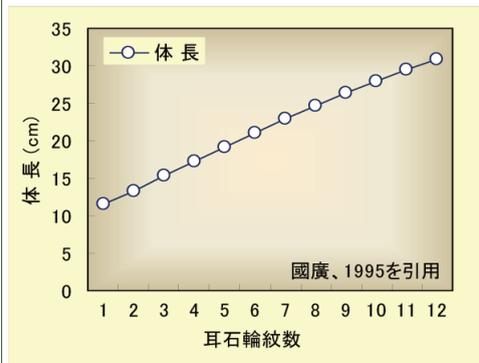
系群名 オホーツク海系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明
 成熟開始年齢: 不明
 産卵期・産卵場: 産卵盛期は春季(4~5月)、産卵場は不明
 索餌期・索餌場: 北見大和堆東側と知床半島周辺の大陸棚斜面に分布、主な分布水深は300~1,200m
 食性: 魚類、クモヒトデ類など
 捕食者: 不明

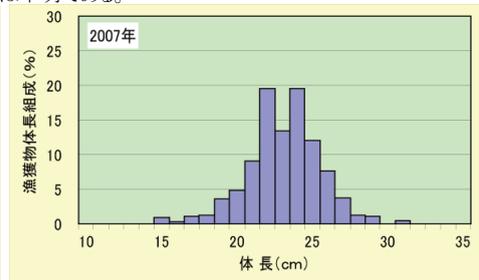
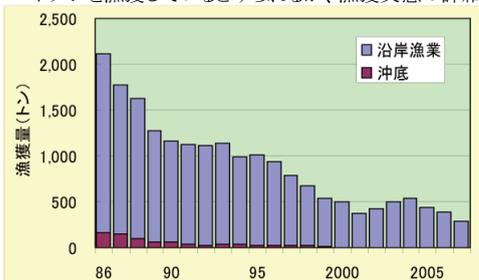


漁業の特徴

延縄、刺し網などの沿岸漁業と沖合底びき網漁業(沖底)により周年漁獲されている。近年の漁獲量の大半は、沿岸漁業によるものである。

漁獲の動向

オホーツク海と根室海峡における沖底と沿岸漁業の漁獲量は、長期的には減少傾向にある。1986年に2,000トンを超えていた漁獲量は、2001年には377トンまで減少した。漁獲量はその後増加傾向を示し、2004年には533トンとなったが、その後再び減少し、2007年には290トン(暫定値)となった。1996年以降、オホーツク海においてロシア漁船がキチジを漁獲しているとみられるが、漁獲実態の詳細は不明である。



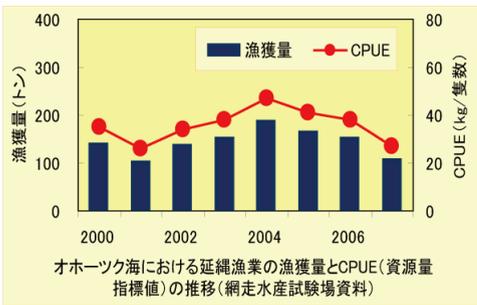
資源評価法

年齢と体長の関係が不明であり年齢別漁獲尾数の算出が困難であることから、コホート解析はできない。漁獲量の年変化と漁獲物の体長組成から資源を評価した。また、2000年以降のオホーツク海における延縄漁業(知事許可漁業)の操業隻数は4隻で不変であり、漁獲努力量が安定していると考え、2000年以降の当漁業のCPUE(操業隻数あたりの漁獲量)を資源量指標値として用いた。

資源状態

各海域の漁業種類別の漁獲量データがそろい1986年以降の22年間(1986~2007年)の漁獲量から、現在の資源水準は低位と判断された。また、2000年以降の資源量指標値の変化から、資源動向は横ばいと判断された。2003~2007年の漁獲物からは、豊度の高い年級群の出現を確認できなかった。





管理方策

漁獲量と資源量指標値の変化および漁獲物の体長組成から資源状態を判断し、漁獲量に適切な係数を乗じた値をABCとする。資源回復を目標とした場合、現状の漁獲圧を下げる必要がある。近年の資源量はほぼ安定していると考えられる。資源を回復させるため、係数0.8を平均漁獲量に乗じてABClimitを算出した。資源動向は横ばいであるが、現在の資源が極めて低い水準であることには変わりはない。未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効であると期待される。したがって今後とり得る方策としては、漁獲努力量削減はもちろんであるが、加えて、漁獲物のサイズ制限も有効と考えられる。

	2009年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	345トン	0.8Cave5-yr	—	—
ABCtarget	276トン	0.8・0.8Cave5-yr	—	—

- 年は暦年(1月～12月)

資源評価のまとめ

- 現在の資源状態は極めて低い水準にある
- 2000年以降の資源量指標値の変化から、資源動向は横ばいと判断される
- 2003～2007年の漁獲物からは、豊度の高い年級群の出現を確認できない

管理方策のまとめ

- 漁獲努力量の削減が必要
- 未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効であると期待される

資源評価は毎年更新されます。